

〈女学生〉から読む真杉静枝の戦時下文学

廖秀娟

真杉静枝は、日本植民地期に台湾在住経験のある女流作家として知られ、特に戦時下の台湾を題材にした小説や紀行文を数多く書き、当時の台湾を理解するには、欠かせない存在である。彼女は、1900年11月に福井県に生まれ、三歳の時、父真杉千里の仕事の関係で、一家をあげて台湾に移住することになった。十七歳の秋、両親の意思で、台中駅の助役で十三歳も年上の藤井熊左衛門と結婚したのだが、二人の結婚生活は長く続かず、二一歳で出奔し、大阪の祖父母のもとに身を寄せ、やがて大阪毎日新聞の婦人記者となった。そして、そこで武者小路実篤と知り合ったのをきっかけに、文学創作を始めた。1927年に自身の結婚生活の破綻を題材にした処女作「駅長の若き妻」（文芸誌『大調和』八月号）を発表し、正式に文壇に登場、作家の道を歩み始める。

ところが、作品よりも「白樺派の重鎮・武者小路実篤の愛人、太宰と並ぶ井伏鱒二の愛弟子だった中村地平のおしかけ同棲相手、芥川賞作家・中山義秀の後妻」といういたってスキャンダラスな一面のみが注目され、札付きの悪評の女として思われてきたのみならず、戦時下に、1940年末陸軍報道部主催の「南支那派遣軍慰問団」や1942年新潮社の中国戦地特派員として戦争に加わり、積極的に国策に参加したことで、日本の文壇や研究者の間では長らく敬遠され、彼女の作品自体は注目されずに来た。

近年、台湾研究が盛んになるにつれ、彼女の作品の大半は植民地時代の台湾を題材とするもので、なおかつ女性の観点から繊細に描かれているという視点から、大いに注目されるようになった。戦争賛美と色濃く思われている彼女の戦時下作品には、女学生か女学生上がりの少女がよく登場する。それが長らく等閑にされてきた。本発表は、彼女の戦時下作品で、よく設定される〈女学生〉を一視点として彼女の戦時下文学を考えてみるものである。

一、研究の現在

真杉静枝は、日本植民地期に台湾在住経験のある数少ない女流作家として知られている。「私にとっては、父や母の住んでいる台湾が、故郷でもあるような、なつかしさでしのばれる。そして、台湾のこととなると、お国自慢をするときのような顔になって喋りたくなる」（「台湾の土地」と、台湾で少女時代を過ごした真杉静枝にとっては、台湾は故郷のような存在であり、創作時の重要な素材でもあることがわかる。

彼女は、1900年11月に福井県丹後郡殿下村に生まれたが、三歳の時、父真杉千里の仕事の関係で、一家をあげて台湾に移住することになった。彼女は台中高女中退後、台中病院附属の看護婦養成所に入り、卒業後暫く病院に勤務したが、十七歳の秋、両親の意思で、なかば強制的に台中駅の助役で十三歳も年上の藤井熊左衛門と結婚させられた。しかし、夫の暴力と放蕩で二人の結婚生活は長く続かず、二歳で出奔し、大阪の祖父母のもとに身を寄せ、やがて大阪毎日新聞の婦人記者となった。そして、そこで武者小路実篤と知り合い、彼の庇護を受けながら文学創作を始めた。1927年に自身の結婚生活の破綻を題材にした処女作「駅長の若き妻」（文芸誌『大調和』八月号）を発表し、正式に文壇に登場、作家の道を歩み始める。それがきっかけで、坂口安吾らの同人誌『桜』に参加するほか、『大調和』、『創作月刊』、『女人芸術』、『若草』などの雑誌にも次々に作品を発表し、た²。一見、順風満帆のスタートを切ったように思える作家生活だが、武者小路実篤との関係が新聞に報道され、世間に知られるようになったことで、彼と別れた³。

1934年頃、高校生活を台湾で送り、同じく台湾在住経験を持っていた中村地平と出会い、のちに同棲するようになったが、中村地平の親の反対に遭い⁴、1939年の台湾旅行の後に別れた。中村地平との恋愛を題材にした作品には、「話しかける人」、「風わたる」、「小生物」、「小魚と出征」などがある。その後、1942年に中山義秀と再婚したが、敗戦後、台湾から引き揚げてきた両親及び未亡人になった妹一家を援助することで、義秀と折り合いが悪くなり、やがて46年に離別した。戦後、原爆被災地の広島・長崎への視察が契機となり、原爆被災者救援活動などに心血を注いだ。1955年6月29日、肺がんにより55歳で生涯を閉じた。

真杉静枝の作品群を時代順に追ってみると、三つに分けることができる。初期作品に多くみられるのは、彼女の身近に題材をとった私小説風の作品群である。例えば、台湾の家族や、武者小路実篤、中村地平との恋愛話などである。二つ目は、戦時下に積極的に関わ

¹ 本発表は、台湾111年度国科会專題研究計画【昭和十年代文學中的女學生表象—浪漫少女心、摩登奇女子、獨立新女性—】による研究成果の一部である。

² 竹田志保（2019）「真杉静枝—結婚への疑念」『女学生とジェンダー—女性教養誌『むらさき』を鏡として』笠間書院、p.384。

³ 1938年竹村書房出版の『小魚の心』には、武者小路実篤との経緯が題材となった作品「小魚の心」、「話しかける人」「松山氏の下駄」が収録される。

⁴ 平林たい子（1960）「真杉静枝さんと私」『自傳的交友録・實感的作家論』文芸春秋新社、頁36。初出は『別冊文芸春秋』1955年10月。そして、作品「坂道」にも中村地平の父らしき人が登場する。（『帰休三日間』1943年、秩父書房参照）

った国策色が濃厚な作品である。例えば、『母と妻』（1943年4月）は戦争賛美が濃厚な小説集である。三つ目は敗戦後に、両親と妹一家の引き揚げ経験を題材にした引き揚げ物⁵である。

戦時下に数多くの作品を発表し、1940年前後に注目され、高評価を得た女性作家の一人として認められたにもかかわらず、「白樺派の重鎮・武者小路実篤の愛人、太宰と並ぶ井伏鱒二の愛弟子だった中村地平のおしかけ同棲相手、芥川賞作家・中山義秀の後妻⁶」といういたってスキャンダラスな一面のみが注目され、札付きの悪評の女として思われてきた。呉佩珍の調査によれば、真杉静枝の生涯をテーマにした作品には、火野葦平（1958）『淋しきヨーロッパの女王』（『新潮』）、石川達三（1965）『花の浮草』（新潮社）、十津川光子（1968）『悪評の女—ある女流作家の愛と悲しみの生涯』（虎見書房）、林真理子（1995）『女文士』（新潮社）がある⁷。さらに、戦時下に、1940年末陸軍報道部主催の「南支那派遣軍慰問団」⁸や1942年新潮社の中国戦地特派員として戦争に加わり、積極的に国策に参与したことで、日本の文壇や研究者の間では長らく敬遠され、彼女の作品自体は注目されずに来た。

近年、台湾研究が盛んになるにつれ、彼女の作品の大半は植民地時代の台湾を題材とするもので、なおかつ女性の視点から繊細に描かれているという観点から、大いに注目されるようになった。やがて、2000年代以降、ゆまに書房の『近代女性作家精選集』、『〈戦時下〉の女性文学』などのシリーズで、真杉静枝の『ひなどり』、『その後の幸福』、『小魚の心』、『母と妻』、『帰休三日間』が復刻され、全集のない、真杉静枝を研究するにあたって大切な一歩を踏み出した。

戦争賛美が色濃く出ていると思われる彼女の戦時下作品を読むときに、女学生か女学生上がり（戦時下）の少女がよく登場することに気づき、戦争翼賛が大事とされる時代に、植民地台湾の巡査や係官の前に「別に大したわけでもございません。極く平凡に、私は良人の李金史を愛している、というだけです」（『南方の言葉』）と、臆もせず愛を告白するヒロインの姿に疑問をもつ。それは、ヒロインが女学生出身であることと関係があるのではないかと思ひ、本発表では〈女学生〉を一視点として彼女の戦時下文学を考えてみる。

二、女学生の登場する作品

先ほど、述べたように、真杉静枝全集がないので、真杉静枝の戦時下作品を集めるには、多くの時間が必要とされる。戦時下に発表された単行本、『小魚の心』（1938）、『草履を抱く女』（1939）、『ひなどり』（1939）、『その後の幸福』（1940）、『万葉をとめ』（1940）、『甲斐なき羽撃き』（1940）、『ことづけ』（1941）、『南方紀行』（1941）、『三つの誓ひ』（1942）、『妻』（1942）、『母と妻』（1943）、『帰休三日間』（1943）に収録される作品を対象として、

⁵ 呉佩珍（2013）『真杉静枝與殖民地台灣』台北市、聯經出版、p. 18。

⁶ 鈴木直子（2010）「高度成長と〈女流作家〉—林真理子『女文士』における女のエクリチュール—」『日本文学』59巻11号、p. 48。

⁷ 前掲呉佩珍著書、pp. 4-8。

⁸ その経験をもとに『南方紀行』（1941年6月昭和書房）『ことづけ』（新潮社、1941年11月）を刊行した。

女学生が登場する作品をリストアップしてみた。

作品名	発表年	女学生	人物
「駅長の若き妻」	『大調和』1927. 08	女学生上がり、	美那子
「南方の墓」	『小魚の心』収録、 1938. 12	女学生、18 歳	唐山氏の娘
「婚姻」	『小魚の心』収録、 1938. 12	朝鮮の女学校、女学生、18 歳。結婚十日後、出奔。	寿々子
「土蔵の二階」	『万葉をとめ』収録、 1940	女学生上がり、現在24 歳、20 歳の時に母の勧める結婚をしたが、結婚生活に堪えられず、出戻りした。	「私」（正妻の娘）
「むすめ」	『新潮』1940. 05	台北の北部にある女学校に入学中。16 歳。結婚三日後、大阪の祖母の家に出奔。	梶子
「三つの誓ひ」	『むらさき』1940. 07- 1942. 02 全 20 回連載	女子大の受験を目指して、書生として奉公。	熱田美那子
「南方の言葉」	『ことづけ』収録、 1941. 11	築地、女学生上がり。夫と離婚して、植民地台湾に流れた。	木村花子
「妻」	『妻』1942. 01 博文館	奈良女学校（女学生上がり）	東山武代
「その姉」	『帰休三日間』収録、 1943	私立女学校教師、女学校四年生の菊組の女学生たち	櫻井雪子

（表 1 発表者作）

- 「**愛しあつた者同士の夫婦**つて、どんなだらう。」近頃それを考えると、いつも彼女の胸はときめいた、「今の夫や世間をのり越えて、**輝かしい恋愛生活**と云ふ様なものの火の様な想像に迄、うつとりひたつて終ふ事もあつた」（「駅長の若き妻」）
- 「それですのに、だしぬけに、あの夫は、どうしても愛する気になれないから、**愛の無い結婚は罪惡ぢやから**つて、あなた、さういふ手紙をよこして、寄宿を飛び出して市も負担ですよ」（「婚姻」）

- 「とにかく、結婚なんて、愛情がなきやしては、いけないものだよ」（「南国の墓」）
- 「でも、愛のない結婚をいたしましても」（「むすめ」）

三、月経への忌避

「むすめ」は『新潮』（1940年5月号）に発表された長篇で、真杉の身の周りの生活を多く取材した自伝的小説である。宿命的な母と娘の不和と和解までを描いたものである。作中で、ヒロインの梶子は母の流産と生理、乃至自身の初潮に忌避と不快を感じた場面が描かれた。

- 母の、女としての生理に触れることを、梶子は、咽喉がつまる位拒否した。十六の娘である梶子には、それが耳たぶの千切れる位恥づかしいことだった。尚、さういふものを娘の眼からかくさうとしない母の神経を、梶子は憎んだ。
- 女学校の寄宿舎で兆しはじめた最初の生理のことも、だから梶子は、他の娘達のやうに、母に打ち明けたりはしなかった。母にだけは、死んでも言ひたくない、そんな感じの方が強かった。
- 植民地の小さな町のことなので、その頃はまだ、梶子のやう平凡な容貌の娘さへ、その帯の赤さ丈で、若い者達の間には刺戟になり、親達は、この娘の若さをかばうために、まるで原生林にでも棲んでゐるやうな怯えた思ひをする。そんなをかしな傾向があつた。

作中に描かれた梶子の、母（流産、生理など、母の身体も含め）への憎悪について、先行論では「自分に無理な結婚を強いた母への不満⁹」や、「乙女の純潔な身体が母に厳密に管理されることから逃れたい¹⁰」とあるように、作者真杉静枝が母・みついと的確執を描いたものだと解釈されてきた嫌いがある。ところが、〈血と穢れ¹¹〉という観点から検討してみると、敏感で、繊細な年頃の女学生が〈娘〉から〈女〉へと変わっていく身体の変化を持て余したことによって生じた焦燥と嫌悪を描いたものだと考えられる。

四、結びに

本発表では、真杉静枝が戦時下に発表した単行本や作品を対象として、女学生の登場する作品をリストアップして、その内実を検討してみた。「愛のない結婚」を強く退けるヒロインの姿が前期の作品ではよくみられるが、日米開戦後、愛のある結婚を唱える女学生の場合場面描写が消え、逆に作品「その姉」のように、腕白な女学生に改心を求め、銃後の理想的な女性に成らせるための論しが多くなることがわかる。一方、作品「むすめ」で描かれた、ヒロイン梶子の、母への身体的な排斥は、単なる真杉静枝が自身母との確執を描いたものではなく、むしろ、〈娘〉から〈女〉へと変わる身体の変化に持て余す女学生の苛立ち、煩悶、少女特有の心理変化を緻密に描いたことがわかる。

⁹ 前掲呉佩珍著書、p.31。

¹⁰ 同注 8。

¹¹ 川村邦光（1994）『オトメの身体—女の近代とセクシュアリティ—』紀伊國屋書房、